

2. 豊川流域における弥生系磨製石斧と条痕文系集団について

今回の調査では、S B-2の住居内の攪乱した場所から扁平片刃磨製石斧が出土している。調査区の位置する場所には墳丘削平後に牛舎が建てられており、近年その牛舎撤去及び整地によってバックホーによる掘削が行われている。住居内で2カ所みられた攪乱もその際のもので、建物基礎撤去等の掘削のため、掘削土が運ばれることはなく、ほぼ原位置に戻されている。扁平片刃磨製石斧は攪乱部の地山直上で出土している。掘削土がほぼ原位置である点と、調査区内外では弥生時代の遺物は住居出土遺物以外には見られないため、この石斧は住居に伴っていたものと考ええる。

この地域の条痕文期石器は佐藤由紀男氏が研究（註1）を進めており、その成果に従って扁平片刃磨製石斧について考えたい。佐藤氏は縄文時代から継続する乳棒状石斧を縄文系磨製石斧、遠賀川系集団（註2）の用いた太型蛤刃や片刃の磨製石斧を弥生系磨製石斧と呼んで区別している。この地方の条痕文期には縄文系磨製石斧を主体的に使用している。そして、豊川市麻生田大橋遺跡や浜松市川山遺跡では、弥生時代中期まで継続して縄文系磨製石斧を生産していたことが確認されている。

一方、条痕文系集団でも弥生系磨製石斧も使用されていたようで、浜松市沢上Ⅳ遺跡や半田山Ⅰ遺跡では条痕文土器と伴出した例が僅かではあるが知られている。これらの弥生系磨製石斧は、中央構造線外帯の豊橋から浜名湖北部に分布する塩基性岩類を石材として用いており、この地域で生産されたもので、佐藤氏によると遅くとも中期には弥生系磨製石斧の生産が行われたとのことである。そして、この地域では条痕文期において、弥生系磨製石斧の生産拠点はわかっていないが、縄文系磨製石斧と弥生系磨製石斧の両者を併行して生産していたと推測されている。確かに、奈木4号墳S B-2から出土した弥生系磨製石斧も地元産の塩基性岩が用いられており、この地域での生産が前期まで遡るものと考えられる資料である。

さて、弥生系磨製石斧生産において問題なのは、製作集団である。一つは、条痕文系集団が弥生系磨製石斧の製作技術の情報を入手して生産していたという考えである。ただ、もしそうであるとしたら、生産拠点である麻生田大橋遺跡や川山遺跡で未製品が出土しても良いはずであるが、未だ発見されていない。弥生系石器専門の他の拠点で生産していたのであろうか。もう一つは、遠賀川系集団が地元で製作した弥生系磨製石斧が交易によって条痕文系集団に供給されたという考えである。奈木4号墳の近くの台地上に白石遺跡があり、ここは櫛王式期の遠賀川系集団の拠点と考えられている。水神平式期には遺跡は機能していなかったようであるが、白石遺跡と同様な未発見の集落が存在していても不思議ではない。そこで生産した弥生系石器が条痕文系集団へ流布していたとも考えられる。

2説とも断定しがたいが、いずれにせよ、水神平式期にこの地域では弥生系磨製石斧を生産していたことには間違いあるまい。そして、弥生時代中期へと続く方形住居といい、弥生系石器の使用といい、条痕文系集団は予想以上に弥生文化を受け入れていたといえよう。

註1 佐藤由紀男 1999 「伊勢湾周辺における弥生系磨製石斧の生産と流通」『縄文弥生移行期の土器と石器』

註2 遠賀川系集団とは遠賀川式土器を用いていた人々のことで、条痕文土器を用いた人々は条痕文系集団と呼んで便宜的に区別する。